春色籬の梅　十二

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

春色籬梅

四編

下

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

かぞのかんのこまもの

菓の名ハ
玉置保赤圓

一包 二百銅
半包 百銅
小包 五十銅

そもそもこの菓ハ小児花を出産のゆゑ用ひ来りて
ゆゑ用ひる菓なり凡小児小用ひる菓昔より世の中に
多くこれを作る事なれども此菓法ハ他に異なり
遠に近に飛れ伝てい句人の舌に花菓ハ
如て病ふさうり者ことをすゝめもあり菓ハ
歌ふその意とこそのゆゑ
家い光徳ようくて小児神を崇ふ稱くの
好菓成網へ〜億万の小児の病ひを
治ようる徳ありて其中ゆ〜もとの
保赤圓ち化家ふ之菓の良菓にて小児救命の
最重とし殊ようの菓ハ金物流業にさ〜合らく

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

小児第一病の始おのりさまべまづ業の即功わるまー成とふあらーて出祝とる方のれ仏法
さー小児方の苦厭をよやく除んと祈ふりのうり
才一○えかんぱまるふたいどんとうさうぱ。ふりちひんを功神のめー
○よるねいーも○かーどまを吟まぐ○そー成えつめ○墨とかーめ○そりかへりて物をとり
○物ふまどろ沈やを○まをどぐーとふる○えちさぶり○ち成わまー○垂花祭ぎち
半れつのさーいきあるたくひ○みどおちふかまりてつ元わり○いろまくきふまきき
すーいん見ーふやせあまろ○きおりーて為成いえ八○ょ元ぐー○山をを沈又ふんでー
○わうひ、お役の浩ーくーとろ○めをとおりてひーうを○めふはーくものを又きたぐ
○ょるあの下をひぎり○瓜をわを○ちんぐう成いぎり○ものーけ。せんうう。つちぐの
つちのたぐひ成食ーー○ょるあの下わうく○ようを成ふぐー○ねどもわるをわくーぐ
○つひう又ふかわふぐ元りのをせーー○ーえぐちうくおれせるうてもづうーー○食すを
るあうひふるをうく○をうはりてをきくうり○ちくやをとるぐーを浩ひづううことを外
小児一切のやうひふのもひて九ーうふ功祈わうるうくうぐひな一

▲右ふまをーーうやき病疫の小児元祝族ぢ方ふれーぐいふふ不及代人の小児かり

とりもをやくさひ保赤圓成をーえくーき病をすをひ大のるろ巻根を強ーゆふに笑ーさ
仁心をなーーの人
○近須法華成弘める所為十方ふ多くいづまも功祈すーるなるおもひたれども利益
の巻ふまるるめ多けまーびあうくふ浩まいるのびをもふ多人ひかんのーまりの子ゲ
事末の絵表ゆを武り持ゆ武が加須用の風雅人大和法橋の家伝ゆを先祖の時より
いと古く小児の病を療治ー粗方人を救ひるる良薬なれどもそのめをむるのの
のをうえを奥めのゆのるさでまー成此巻えをすーふすめて天ゲ下にあ弘め限ーるを
小児の病ひ成巻くすーるひ病多るの子ども元の母れーちの安抜るーるふの成をろ
教ハあをびまーくもるひるる教ひふ仏ーれども作者為ふが年久ー考法方の代ーを為
ぐーふ四ふ力成ーふむるれふがーしの恩礼こもふ是ーーと名ひ材るる老婆かより名
商利欲をねまぐるか須の法験成解治ーらひ僧を宝ふをを玉ー在ーふ永沢所を
ちーーらく世ふ生ーー玉ふ小児元の十ーをやふ小成長ーかーるめをーを元ふ年の時代を安
病ふーのーーを多ぐ報恩ーちの寿命成も変をその子ハ者ふの一ーとをるを
くまぐーもふのふ第ハいつーりぐ成ふーーぐ考ーーて利の為ふせんーを

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

日ごろ〻〻実ふ春水がすゝめそこなめさせまこひ系紙をよませ世の人ふ方ふも勧め
自化系ものの善事成まさまく勧する公形るまゝ小児さ多がをいとゝ多ゝ
所人ふ長和せもゝふゝ〻ふく薄で勧ひさそまつるめのり

江戸　狂訓亭主人為永春水誌

御免製藥所　小児科　武州埼玉郡加須町　大和氏門司法橋精製

東都駿河町六角下　袁世凱屋翻出来
大阪心斎橋二丁目　摘磨屋弥七
江戸横山町二丁目　松井屋長義
同本町三丁目　近江屋義兵衛
江戸本石二丁目　右田屋武兵衛
小伝馬町三丁目　丁子屋平兵衛
同室町二丁目　浜屋八郎兵衛
同小伝馬町三丁目　九屋義作
浅草茅場町　村田安右衛門
江戸小舟町三丁目　大坂屋源助
同伊勢町　万屋八郎兵衛
上州高崎田町三丁目　青木金右衛門

春色籬の梅　巻之十二

第三回

東都　狂訓亭主人著

春の夏ふ花ふ去りてまた二ツ芭蕉の明日の山風に
八橋舎うゝ人が秀逸ふて実花のゝゝ世の中の義理ふ通ゝ
人情の実ちゝうけり酒ハ弘法の中旬の空最日暖なる
花の山名ゆゝ雲ふくる大悲閣御山の中ふ牛一の旅ゆる
清き清水の霊堂ふ往ふ水の花見の雑葉花見山他の

花美と妓の郷男女ゞ見ろ看らまろるふ鉢の品さも合点
哥〳〵連の人貴客の交遊さゆゞくふ楽〳〵尽沢まるのほや鯖
そうろうまろ他夜右と左と格遊人花の木の元花逍遥する人ケ
なる香泉湯没沢人〻人花の香もうけとゞ花のふれと
酒の吸筒に素兵當休らふ寄の千中ふ三四人ある女連ふ
の着ろ〳〵ねども別て見ふ三一人の腹幸ハ〻〻うふ十六七
顔寄の美業ひざやろうろうふいくも更ろう手人品の情さの
今日山宮ふ銭ふ人ろ花見ふ楽ふ娘の中ふ似〻ろうもひふぬ

小町姫男深接の精霊うと鍛ゞ人ろ祝の美人ろ仕方ふ
休らふ三四人ふ當世様の鳥〻〻連色男うの業平自慢業
平物ろの妓男艶次郎ざる風の人も文ろ酒の機嫌ふざれ
真の事ハ初ふ仕事同志「ヨ〳〵此調ふ文ふ仕春桃て分れさ
のろうや東物ふ文晃風の蟹〻ろ仕事風ゞの明ふ祇ゞ模様
恋ゞ文侠仕身ハ今調爰を落〻ろうろうろ人ふ〻ろ借て春ゞ
学らふ　花〳〵ヤ十分悪〻言て〻ろ上で借て春の心服り
鉄〻乳性ゞノウ　「ア〻〻〻〻此身の極る敵度ゞ在のゞ好

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

男が格別能見へるのだアチ縁で看せへト言ひながら桜の
木の根の高く出てる所で烟草の吹がらをそこへまきちらし
煙管の雁首が捩て見へる・ハイこれハ大きに粗相いたしたら
ネエ今やらかしたのだ・エヘナニサ花暁さんの烟管を借て雁首
の方を縁へ近ふ亮したアチ・ナニサ花暁さんの烟管トやらは大
事ぞ品の烟管でもなかろふ恐ぢやア悪ひぞ・花ニヲシ烟管を
ますべけ羽織を着上ヶる槌・縁搖して・エ羽織を
兎にかくでも身分の烟草の代リハなひ柳原仕入の

粋仕立物だねへ・ヘイ余り飾りをかせなさんな自分が手柄
ものだから男でゐるト羨ふ・ヨヤしかし気の毒だの・ヨニサく
野暮な喧嘩をおつ始めるので早く烟管を見付なせへナ畜生
生き中へでも落てまごらう・ヲ左三段ぎ言けドレく探しく
見捨ト立ながら若草生し芝原を彼方此方と尋れバ
連の友達も諸ともに尋ね歩行を花暁ハ温淳に・花「花降く
多勢の川でも彼子ノ手様よ衆人が探ひじやア邪魔の毒ぎ
生まく是ぞ捨て置て　お足をなせへト一人座をする花なやる

傍の人々さき所へ向て体〻〻彼娘ハ竹内の関ゝ人花
暁の側へ立寄て〻〻そ人〻 娘「モシノウ此烟愛ハ貴
君のでござりまするか只今私の孫の上へ乗て来りまして
どうぞいとして居りまして〻〻貴君の此烟愛の孫の
在作のご関えまして持て来ました烟愛
でおざりまするそよと完ぬ〻の色数とまふ是ハ烟愛
の屏風花暁ハ烟愛の屏風〻〻ようの娘の顔を後容と
視て早変風の花吹雪我慢とまろうれど恋うる花の

兄貴と恭の花娘ハ顔を赤らめ〻〻烟愛を花暁のよみ
渡〻言葉おとけるの立別れる折〻速の女達も家延の
計を立て娘を伴ひ桜の本を行やうと行ふる花暁ハ
本意なく見送れど辞集の絵を見て風情を見惚る
女達が〻〻花暁さん手の烟愛ハ如何様人を仕やしたよ
イヨ竹のやうなものが〻〻何ごとの娘を立〻〻烟愛を見つけて
まことのこと〻〻いまだ〻〻尋ねの言ひけるとようけ
竹のうへハ烟愛が花暁さんと彼娘の様人を恋

国立国会図書館　春色雛之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

物ごと「トキ」役狼ハ仏者ごとく「ナサ」仏でも城法界の美
罪狼ごそて人間ごと行て好風ごとノウ「ハ」「ハ」
中ごろハ「ハ」「ハ」仏様「ナサ」狐ごもあとうのブメ
古ひ酒屋ごせ「ナサ」狐ごとのハ只の人の狼ごとある
まのとのつごバナ仏様も茶屋のしと狐ごる見位ご見物
と傍ごて居るしやうの「ハ」「ハ」ノウ気が付て見まと
宮入狼の野暮らしの世ごとしの所もあ「ハ」酒屋と
見位で人間ご行「ハ」いごと如生の狼ごとの「ハ」「ハ」

花暁さんが役狼ふ視物て此所として居るご可笑ごと
ある「ハ」「ハ」ごとごとて「ハ」「ハ」縄愛を捨て来と礼と言ごと
乃ふ仏呼へる行て住まごとごとの気の毒ごとバナ「ハ」「ハ」
狐ごとの気の毒サノ「ハ」「ハ」西方ふバ礼と言
狐ごとの気狼ごとの気の毒サノ「ハ」「ハ」西方ふバ礼と言
とも行て役狼でハ仏ノ丁寧ふ接拶をして住ハ仏所
ごと行居て来ごとごとの「ハ」「ハ」ごとの家の葬れて行と
狼ごと乗ごとて来て。貴方ハ花見の時お見ふごと
方ごと行テ尋ねて来ごとごと。今見ハ毎人ごと

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

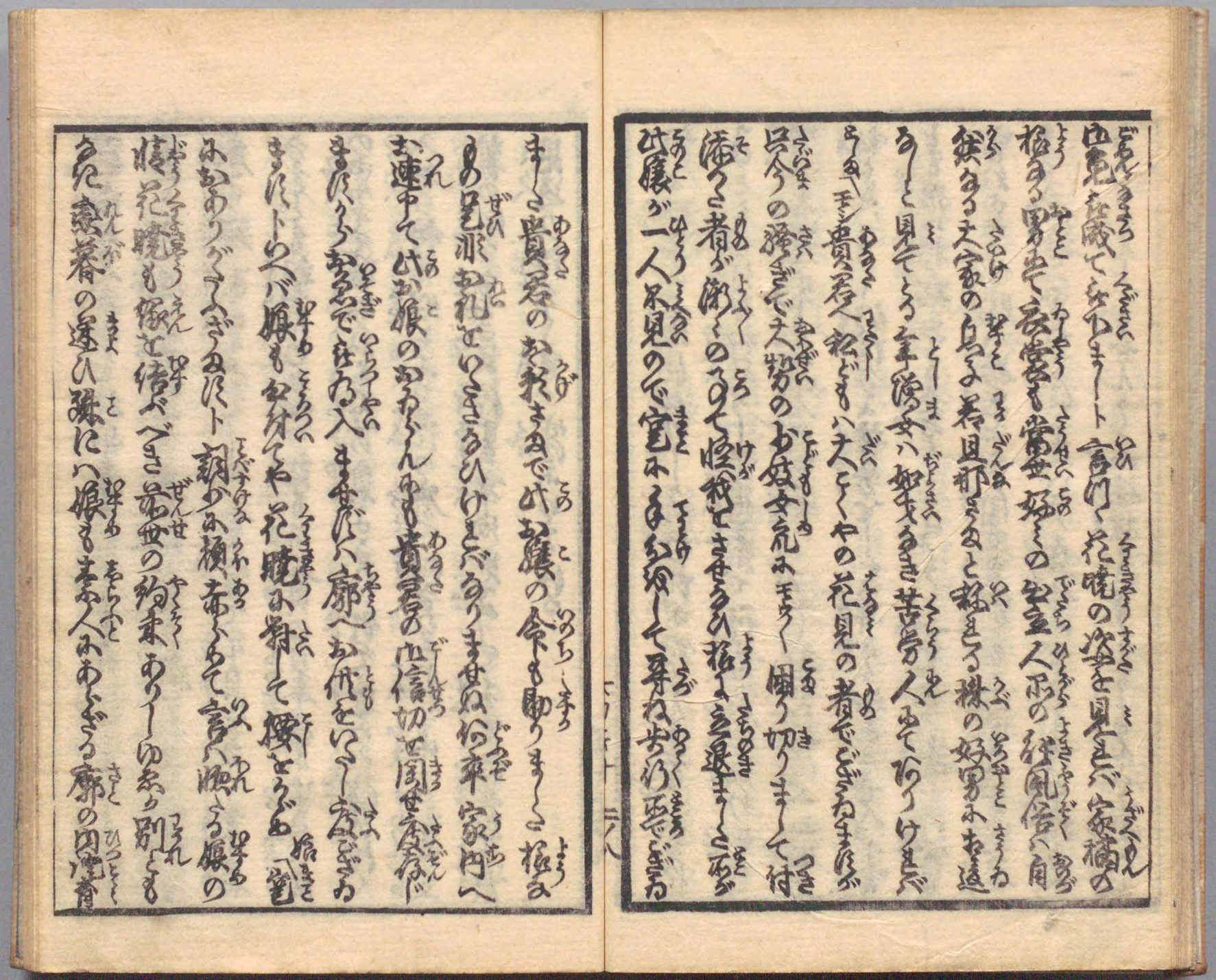
親育さ及へ養育して私一人でおざるまたる仙家山方へ
お通り成て歩下まし「アハヽヽ為うまく行べ行べ
男への外ハ丈夫でも持て居るとつまらぬ花へ
面白くもなく持ぶ手折へ乱をもんで捨ね歩りあめら
馬鹿らしい「サア出まさと場所を改て他の花を見折
おやアるひ「そもそも宜らハサヽト香泉坊所の代を
立き山所を立上り未見花を探やんと山の光路へ駕く
折しも酒狂人ら乱心者ら又ハ盲宛ゥつろ〳〵ねど白丸を

振て群集の中を切抜ら〳〵立法の落ぎ者猪やんとさる
人ら盲宛の相ら和ざれども血ぶ〳〵けふ〳〵人も
ひらて野ぶき番成の男女山脇を立る落花狼
藉仕方此方へ逃逃へ狼ら仕ハ跡更ハ法体びつ木の
根ハ元突倒ら折り山より下へ落ら〳〵連ハ別
〳〵ぶ別れて途方を失ハ千中ハ役花暁も連ハ別
まて見失ハ茅ねひぐ〳〵て込合中を抜分ぶら行所ハ
倒まて拾也一人の狼立上ら〳〵とまる狂ふ又〳〵ワヲリト

人数にして近所へ近付白刃の光アマ立込揉合雖然の
人々狼狽まどふ逃退んと人を突退踏倒し清きハ乞枝
踏きハ捨び怪家をまどるあり目を付髮中ふるゝ美
けるハ既ハ今の人倒まつ狼ハ猛毛逆立ち場の位義踏教され
もまる狼ふるを花曉ハ見届て引抜一刀勝傍の頭を
押分山内の寺中の庭の外間ひの本堂のうへ退れつ狼ハ
いろ〳〵面を見まハ是先刻の狼ハ家白毛と化ぬ
外絶常体ふるぶるふ時も頭狼の外ハ人も散乱着も位

所へ影ぶ見へ〳〵ふ此所ふ人も安堵ふ
るとこれが付き拝ぶ〳〵頭狼を殺て住人狼を助け知
呼へ夫寄ふる三四人の男女
私どもハ〳〵ふ狼ふ苦労をして尋ふ知とまを人ヨト言
ども狼ハ杉寇ふ〳〵ふ言ぶ〳〵ふ〳〵委〳〵ふ
言ぬ内ふ花曉ハ居ふを言聞せ立別ふとまれハ業場の安
ふ「五郎でぶるまハ〳〵ふ丈ハ子ふ義ハぶんじまを人
おゝもぶんじませんふ此樣投ふ〳〵ふ〳〵ふんぶ真平

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

新造なるべきゆをはやまされば今の男も手代と
見えて花魔と嵯峨ふなさび紀のくるふ風と言も流落う
廊の舞面白そふなりしべ金ふ富て不自由なく年暮
なるとても紙屋花の古地の紫も同貫の日本橋ふ近き伊勢屋
の車もよ湯ふ乗れ乳性の良ようえんば新て垂ふ渡ひはく
入相の鐘ふ咲そふる花の廊へ傾る三花の山より武蔵文
禁の町を急ぎ足行雲亭波見るうてそふ東物語ふ遊
見返り程なく意が窟ふいろうける

私奔私行の醜態ハ題とも両個ふ一貫に乳親子に
不変夫婦の情合他金くハ手ふ遊ひ一羅もゆれ
さるくふ見りうんう結ぶど世るの男女ガ見ふ思ひ初る手紙
ゆハ恋の手ふ浪越さびと抜ふ文ざるものふハ恋ふ新て
行ぶ義理ふ人ハ倦ね駿別の中とるも他見ふ見て表
博ふ果要ふ者と傍ふ而已乳恋ふる人ふの丹城と乳頭
ガ中ふ乳ハ如手ふの神の力を借ぶと生涯夫婦ふ通る

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

道あるべしをなかなかに心弱くて濡逢ば百年の寿
なり一世の情人絶て無しと昔より言ひつたへし最口惜
きことならずや再読も花暁を待ちはしへ衰が露の里に
名も高き大岡屋唐助といふ娼家の人々にて家の嘉
例の妓女の花見花衣を尽し催しに今日の一日なりし
また鶯は花暁八野暮なれば息子より彼新艘の返れに
かうすべしとなくも代を経て参りを見せたるは世先相方
定不定の傾女を揚て一夜を催さんと為す所彼新艘八

此楼にて第一の全盛蔦之助の姉女郎お雪といひしが内
証へ引移りながら理なりて蔦之助の生活せるも内証にて三
分の世話にて在けるが今はかくなる老女お菊と並て意見を
ふくむ事なりて身は部屋に居ながら先刻より何か此
言を聞て居る　たとへ如何なる事がありても他家の
娼女郎や吸盛女ではなりますまい　花見に出る衣裳の着替せ
引法なで来るまんぞんに縁でしいるすまして後の子
また長助奴も市之済奴も併りおりひるまに出さきへ今

然ごの。いろは年も不行内所をうの身ぐらとのいく
放ひして海あり孫の叶ふ伸く町の番屋の内うふ
言込んで来さお客八隠ふ姫の乃ふうるお人らしいふ
私が奉込で遊ぶをしさのふ子身の乳ふ不入男ごそ
で弱癖と付て引ふて仕来て今日く途中で燈こお人
が引ふ直ふ引連てお客ふして生度うんどと手招る我
保女所方を今ふふさとちやア私が役ふ夫が節ふらと
ふひ好ふ手身猪ごらうト結ふいらやふ猪くしく

十面はくうて居る茶を通ふうるを代新茶の市場と
いうを曽止ふ　ヲイ〳〵市場ごん今の仲のお客さび
色酒の一番も上ふうび紙色れを中て保しかが紙ヨ直に
女郎衆と知人のお留中そのといふるくませぬヨ
市バイ者ふ　遊ふお人品の社居旦那らしいふ知ぜ
中ても紙ちやア ふひふ ふみ お客ふよしとそ知ふる遊の
ふる紙ふ お方でも　ようく　ひふ ふひふ ふひふ知まるふ ふひふナ然
高て袖を合方ふ知ふふと言のごエ おい来ふふふ風

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

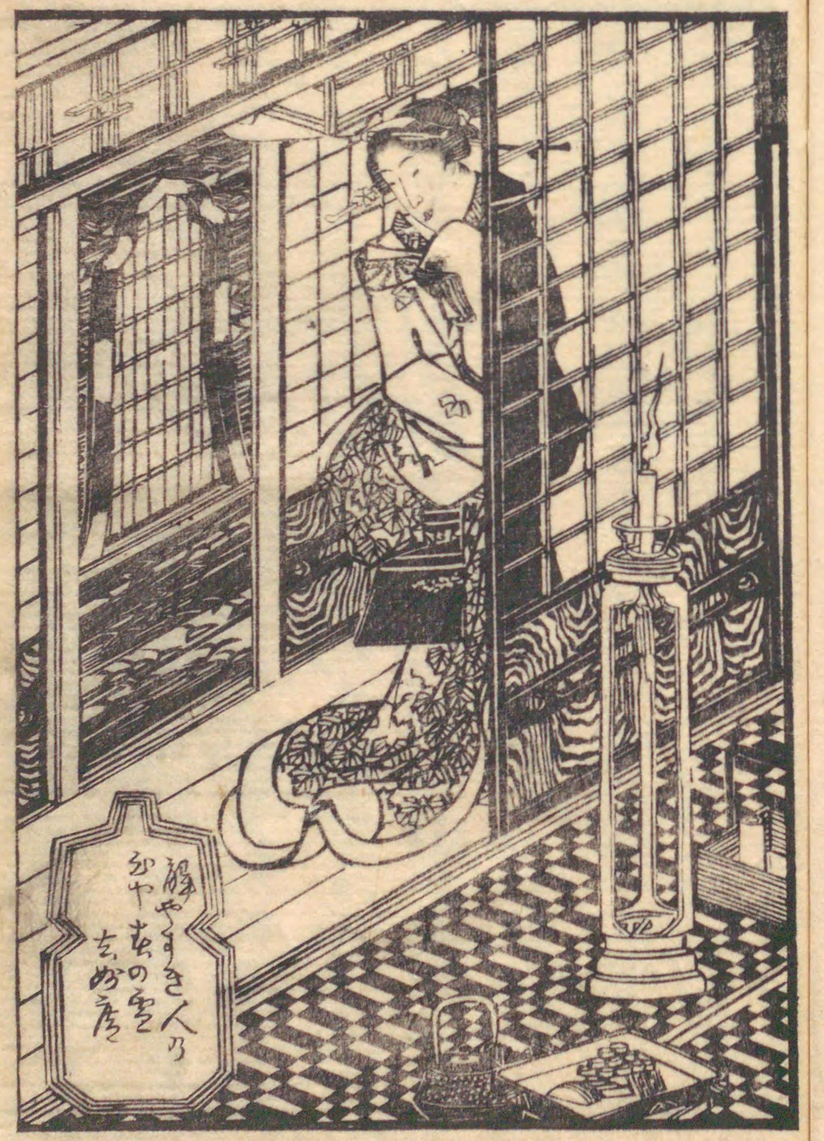
ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

来のお客ふよりやうく〜しく出てとい〜おわらんいえ
来新橋元ふもあつまりて　市イエナニ全体お雪
さんの世話を頼りて　おれをさそうといつてお供を
おさのごうら戸鬼も角もお雪さんをおあとへ
イヤ〜そりゃ出来ない　出来ない　そりゃ物ものを
さまたてゝあるものゝ　お雪さんの世話ふ自分とおれどもゝ
の格別直ふ彼庵を今方ふ出て　お客ゆとい〜吉ハ
私ゞ不義わゞト一個眼ふ角を立　邪ヲをさうんと

仕ようける
星を合とりつゝ大ふ頃　お雪様　合方ふ
言込〜　客人お帰りよ　働き仕ちの金を
楊枝ようを今〜所　お雪ゞ不義わゞの家ふ
梅〜男ふ客中ふ好男ふらゝき　花暁を客ふ
さんとさうをゝ〜　此言をいふうゝ又お雪を
名ぎ〜ふて　言込てる　客のうも　遠く分解すハ
次巻ふちゝ



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

時蔦〳〵助の兎お巻の初子〳〵あのうんが
然お言うまいに お巻どんは考渡お月ふうらく成ざあれ
うらく考へ考へて お云ふ成まうーと言捨よして大和行
お巻く病よ陸ども家のお徴の今盛りハ蔦も立ざ
まびおぐり〳〵と頬を膨らー蔦〳〵助の産しきれのされバ
蔦てよう嬉〳〵蔦るあのうんの復立 芳〳〵アノ子お巻どん
今私ハ関ぐるみお雪さんのあ雪のうるふ紡てお糸ぐ作
山ふ〳〵言うなさそんさるさぐ私ぐ情合うふ花魔

きんの方でなるうハバお雪さんを合方ふ半て呉るまう万一
関遠ぐなるまハ私ぐ蔦変ゆーて お糸達の蔦相うハあ
るひョ 〳〵そんでおざるまいりそんでも 隣り怪くしく
考〳〵背のあのうんの見識を 山谷のみのハさうふしふ
ざるを孫に花魔さんの人品を 育れバ お雪さんの お客ふ
おて仕ても和らしくいあるません 都てお雪さんハ 待る伝
ざるまるョ 〳〵ハイそうやう 衣裳形容ハ 立派で 独らしくも
おざるまいに まのぐ お糸ふハ 〳〵 分斉の お人ざる 智まも

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

言てゐる折しも あて花暁の別
座の揚屋 伸る町の一文字屋そまでと知らせのありけ
るバ早速ふ二階へ通り花暁の仲之丞ふ逢入
ちまちく若旦那 紅今月八 ちゑ入まして 保ぐ仙遊の
客 乎下 きんごろ 呂今 お使でこざゐまして 花暁
て 参じまして と言申ふ送り 寄も 持参りまして 初会
の 客 の 仕法 おしも 桜月 ときて 夏八 文 赤の 美 原の
ちゑ 花暁が 行屋 きとうる 迎 ありけまバ 嶋 文も

多代もことを賞又男風俗の当世 ちゑ 波見合
新廓の 始めて ちゑと 廊下の 脱ふ 若 脇の耳ふ入
けまバ 若 乎 同 ちゑ お 若 呂 八 花暁 さんの ちゑ
仲ふの 仲ごろ 初 ちゑ と見 ちゑ て 言 ちゑ が 一文
字屋のゐ 来 ちゑ 仲も 角も 知 ちゑ
だ ちゑ 内 初 同 ちゑ も 化 ちゑ 松 ちゑ
仲 後 ちゑ お 雪 さん ハ 私 が 頼 ちゑ 時 ちゑ ちゑ 波 ふ
お 雪 達ふ 言 ちゑ ハ 松 ちゑ さ ちゑ 我 思 て 呂 ちゑ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

ト たゝ一つまさきそ咲きものか繁の中ハ梅一けまど花
曉の臭の上に紅 みそ文嘉が家つゝのさくらひるど紅粉
をいつぐさ振るけまバ 不素ゑ ふ 蔦〻 助人 行よく 扶
桜をしてさも〻と 部屋 保り通る 新廣 乳 と 白眼
行ッブッく 口中 此言 消うゝ ゝ る 火鉢の火を 流迄 紙
ゆてのつぎ 文 反ぶゝ けふ ゝ る 魂面 火鉢の 見ふ 〻 き
面白ゝ 然も 〻 〻 き 風俗 大昔の 世
の入町の 廓 入 葉 ゝ ん と 耳 ねて ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ き

と 吉ゝ ゝ ゝ 今の 世 ハ ゝ ゝ く 雪 の 大 ゝ 人 ゝ と 三 亭
春馬 先生 ふ 関 ゝ う 再 説 も 千 夜 の ゝ 刑 ゝ て 刑 ゝ
関 寂 ふ 清 ゝ ゝ ゝ 毎 ゝ の 勝 言 の ゝ ゝ ゝ ゝ 中 ふ
不 思 議 ゝ 縁 ゝ ゝ の 結 ゝ ゝ る 花 曉 ゝ 雪 ゝ 関 門 へ 他 る
ゝて 唄 ゝ 古 ゝ 小 唄

「 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ の ゝ 柳 ふ ゝ 門 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 雨
清 ゝ ゝ ゝ ゝ 山 桜 花 ゝ ゝ ゝ ゝ 縁 ゝ ん ナ

ト 唄 ゝ を 関付 書 「 ヲ 入 ゝ ま ゝ 放 ゝ ゝ ゝ 居 ま ゝ ゝ ゝ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

208
15
693

アノ花ガ[illegible]ノ縁ウヘナ[illegible]ノハ丁度今日私ガ[illegible]
春門ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ノト同ジ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
私ノ[illegible]ノハ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]

でも宅初ハ貴君モ私モ花見ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
則ち花ガ嫌ヲ縁ざヲ[illegible]ヲ[illegible]

言門ヲ実ハ花の奥千千ヲの実業ハ[illegible]須流行類の業
花橋くらへ化粧水を粉迄ゆ水千年ヲの[illegible]ヲ[illegible]
梅の林ハ眠ヲ如ク[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]

日本第一の
御化粧の水 花橋 清澤のくすり 代六十四孔

春色籬廼梅巻之十二終

書肆弘所 小傳馬町三丁目
書物問屋 丁子屋平兵衛

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用